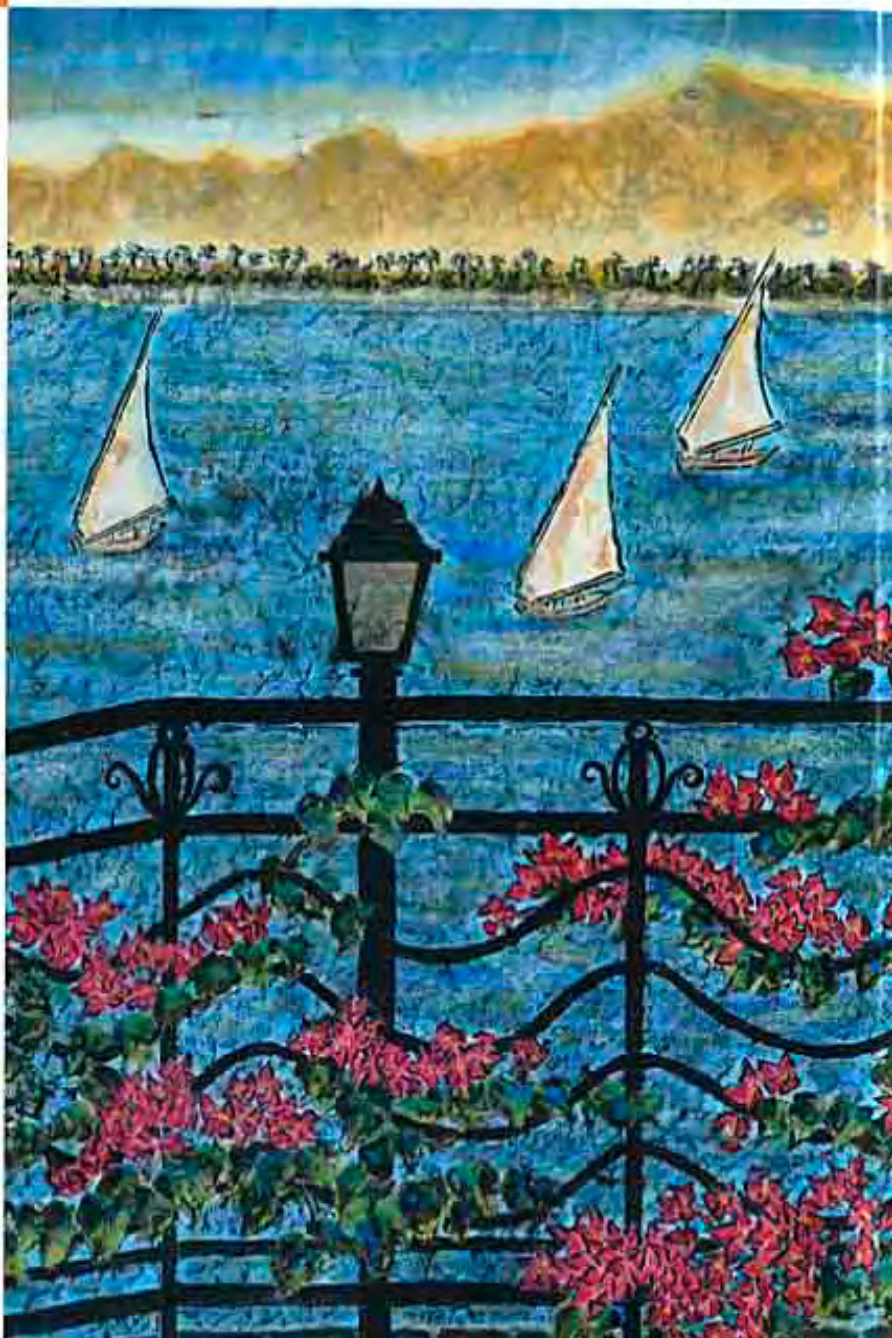


冲

9  
2016

讲句雜誌[4:3]



# 渾身咲き

能村 研三

甚平着て少し遠くに來すぎしか

夾竹桃渾身咲きを怖れけり

奥にゐて連られ笑ひの涼しかり

歩を止めゐ動く歩道や溽暑なほ

## 『吟行案内』

この度、俳人協会から吟行案内シリーズとして、あらたに「大分吟行案内」「新兵庫吟行案内」「富士山吟行案内」の三冊が刊行された。いずれも、最新の地図と吟行地の写真がカラー化されて見やすくなった。「大分吟行案内」は、大分で協会の理事を務めておられた倉田紘文先生や秋篠光広氏を中心になつて編纂されたもので、「沖」からも亡くなられた江瀬深亭氏をはじめ田辺博充支部長、河野美千代氏、林一郎氏が執筆を担当した。大分県に句碑のある登四郎の

国東や枯れていくくの仏みち

水よりもせせらぐ耶馬のいわし雲の二句も掲載されている。私も大分にはたびたび訪れているので、句はあつたが応募締切に間に合わず掲載されていない。次回からは「俳句文学館」の広告をよく見て注意しなければならぬ。

今回も八月に入つて、長崎、大分に指導句会に伺い翌日は城下鯉で有名な日出（ひじ）町を訪ねた。

反りかへる煮鱧八十八夜寒

吉武 千東

蓮の花一茎ひたに捧げらる

蟻地獄噴火の煙ありさうな

全身ののめり極めて箱眼鏡

夜の秋や刺身こんにやく薄造り

炎帝の退位うながす雷ひとつ

撒水車街次々に更新す

太平洋戦争末期、特攻隊の一つの人間魚雷の基地がここにあり、回天神社に祀られている。

『新兵庫吟行案内』は平成五年に刊行された『兵庫案内』に続くものだが、この地域も平成七年の阪神大震災から二十年の年月が経ち、街も大きく変貌していることから、今度の新版には大いに期待している。

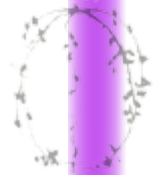
この地域は余り足を運んでいないので、伺いたいところの一つである。

『富士山吟行案内』は富士山が世界遺産になつたばかりなので、正にタイムリーな企画と言えよう。これは山梨県と静岡県各支部が連携し合ってきた本であることにも意義がある。富士山には若い頃三度ばかり登山したことがあるので多くの句に触れることも楽しみだ。

現在「新東京吟行案内」の刊行が準備されており、これには私も応募をした。「沖」の東京例会の時などに便利である。

『房総吟行案内』は伊藤白潮先生が支部長の時、平成六年の時に刊行されて既に二十数年が経過している。この時は私も編集委員に加わり何項目かの執筆をしている。増成支部長とも相談して千葉県でも『新房総吟行案内』の編集に着手したいものである。

# 蒼茫集



唄ふやうに

望月晴美

風鈴のささやくやうに唄ふやうに  
夜は色を手放してをり凌霄花  
ハーブ奏者その細やかな指涼し  
一途とは淋しさもあり水中花  
夫来よや駆け出しさうな茄子の馬  
茗荷の子貰ふ両手に余るほど

鬼百合のごとき

荒井千佐代

鬼百合のごとき穢を持ち我在りぬ  
ひやかな猫の足裏や半夏生  
隣席に聖尼夏夜のコンサート  
子を二人この家に産みし百日紅

網棚に赤きベレーや巴里祭  
揺れつづく吾の魂も凌霄花も

晩夏の翳り

辻美奈子

合歡の花空気のやうに色づきぬ  
夕焼を告ぐる鳥語のひとしきり  
兵役終ふやマツコリを涼しく酌み  
造り滝見ていくばくの揺れ心地  
いかなる神なるや炎屋のテロリズム  
晩夏の翳りマンゴスチンは玉と熟れ

軟弱

安居正浩

甚平に軟弱なひもありにけり  
吊り橋へ弱氣の一步夏の雲

花石榴村に人影なき日なり  
ゆるやかな風も添へたる川床料理  
眼裏に螢火のまだ揺れてをり  
勢ひの余り実梅は結界へ

一徹そだち 渚上千津

大利根の一徹そだち白菖蒲  
跛なへに伊能の郷の鰻美味  
みやび名の十二橋寂び濃あぢさゐ  
存へて会へぬ人殖ゆ走馬灯  
一手間を省きたる染み羅に  
終刊号ごころうさまと書き炎暑

無 頓 着 小松誠一

逃水や邂逅の名の出ずじまひ  
無頓着な割にきちんと更衣  
短夜や逆引き辞書を多用して  
黒南風やEU離脱といふニュース

横書きの俳句に惑ふ日雷  
御旅所の到着を待つ静寂かな

夕 風 宮内とし子

江戸風鈴夕風に酔の匂ひして  
ポタージュに金の膜張る巴里祭  
卯の花腐し雨脚の見えてくる  
訛ある男を信じ桜桃忌  
羅を着る身の力抜いてより  
青信号潤む卯の花腐しかな

浮 力 今瀬一博

青梅雨や伽羅の匂へる維新展  
梅雨冷や烈火を待てる南部釜  
夏鶯一拍強き声の張り  
梅雨の蝶谿の浮力を捉へけり  
とうすみの草に触れずに止まりけり  
花海桐風に細れる万葉碑

三輪車 大畑善昭

僧庵の垣に鶉の巢僧歸る  
孫一歳五歳九歳軒菖蒲  
紫陽花やまだ漕ぎ出せぬ三輪車  
手元暮れ木が暮れ夏至の水暮るる  
鎮魂かにいにい蟬の長鳴きも  
みちのくの駅の風鈴しぐれかな

赤翡翠 上谷昌憲

雨上りたる一燦の赤翡翠  
木洩日を床几に配り滝見茶屋  
瀬の音をつつめる蛩袋かな  
枝垂梅健気なる実の二つ三つ  
青梅雨の水槽に鯉めくれけり  
梅雨滂沱慢性遅延山手線

まごまご 吉田政江

一瞬の宇宙空間茅の輪かな  
夏の草曾ての鉄路ほしいまま

ダム底の過去まざまざと梅雨旱  
花石榴木より降り来て喜寿といふ  
後追ひの音ひゆるひゆると花火玉  
離脱脱出とや地球裏より明易し

風湧いて 田所節子

大滝や岩打つたびに風湧いて  
はるかより波に白南風乗つてくる  
波と何語る水母は海の花  
母へ時ゆつたり使ひ濃紫陽花  
三伏の汁椀にある生姜の香  
涼しさの表面張力児の涙

黒日傘 森岡正作

操車場青田へ二輛突き放す  
教へたる道違へ行く黒日傘  
羽抜鶏大阪弁は嫌ひなり

棟梁の腰の浮きたる祭笛  
山開き過疎の一筋賑はへり  
万緑の中の稜線色違ふ

神の夕立

千田百里

明易しへ音記号のやうに覚め  
葉桜となりて染井も八重もなし  
大鳥居くぐれば神の夕立かな  
玫瑰や「沖」に幾たり英子さん  
空海と居りて涼しき伽藍かな  
着陸の車輪に火花楸邨忌

風袋

楠原幹子

初々しき甘さと思ふ枇杷ふふみ  
青蔦の窓よりピアノラフマニノフ  
空蟬の風袋といふ重さかな  
神の意に添ふや向日葵倭小化

日盛の塩飴ひとつ含みけり  
暑気払ひして二日酔ひしてゐたり

雲海

杉本光祥

サーファアの分厚き胸に日が躍る  
磯笛を吹きてまた消ゆ鮑海女  
自販機に呼びとめらるる溽暑かな  
一村の戸ごとに水場かきつばた  
雪溪のこの一滴が黒部川  
雲海に波打際といふ奈落

発掘

林昭太郎

八月や前進のみの回転扉  
菖蒲園雨の匂ひの風渡る  
白南風や海一望の砲座跡  
万緑のなか高らかに呱呱の声  
夜の雲となりて峰雲なほ育つ  
発掘の土器に番号雲の峰

# 潮鳴集



すいすい

町山公孝

くちなしの花錆びるときなほ香る  
大夕焼日本平が燃えてゐる  
登山帽集まつてくる酒場かな  
はつきりとももの言へみ歳はたた神  
みづすまし晴れてすいすい曇りてすい

白 絢

福島

茂

うつうつをうきうきに変へ盛夏来る  
都会では干上がつてゐる天の川  
男にも艶といふもの白絢  
青空をひつくり返しラムネ飲む  
コロツケのじやがいの潰す終戦日

葉

脈

大森慶子

どの部屋も山の名付いて涼しかり  
和太鼓を打ち込む子らやシャツの汗  
梅漬ける頼らること生き甲斐に  
和紙に透く葉脈美しき団扇かな  
待つといふ期待噴水眺めつつ

コインは表

諸岡和子

敷きつめて昆布干し場の石まろし  
浮世絵の髪の本づつ涼し  
かたつむり潜望鏡の角出せり  
草を引く徹底抗戦もうやめた  
コインは表夏旅は火の国へ



夏 祭 七種年男

紫陽花や小樽運河は藍深む  
沈黙は鋼の言葉ひきがへる  
手の内を見透かされをり水饅頭  
島ひとつまるごと舞台夏祭  
峰雲の軒先にある日本海

夜の帳 七田文字

六月の書架の谷間を魚のごと  
麦秋は胸中にあり噎せにけり  
かはほりの下ろしゆくなり夜の帳  
威丈高とは子を守る羽抜鳥  
海鞘食んで仲間意識を確かむる

くちなし 古山智子

くちなしや母のいまさぬことふいに  
背泳ぎの真白き指のうつくしき  
落雷や己に戻るまでの刻  
夕虹や母でも妻でもなき時間  
方程式一問解けて明易し

好奇心 加藤富美子

黒南風やバングラディッシュに子の出張  
麦藁は遊びの種や昭和の子  
山男の子が置きくれし登山杖  
白南風やいまだ消えざる好奇心  
病みてなほ声の元気さ百日紅

吉凶 荒井千瑳子

吉凶のいづれや夏至の月赤し  
ゐるはずの目高や数の合はざりし  
梅雨深む退蔵の書も我が一部  
くちなしは闇への供物香りけり  
音聞こえさう南天の花零れ

四万六千日 平松うさぎ

持ち帰る四万六千日の熱  
黒南風の岬を灯す珈琲屋  
闘魚てふ孤独を飼ひて夜の深し  
フォービートに長足弾むあめんぼう  
雨音や藍色ちろりの冷酒酌む

# 沖作品



# 能村研三選

市川市

小林 陽子

すつぴんの美しき卯の花腐しかな  
路地裏へ 四万六千日の風  
地球の傷をちんぷいぷい蝸牛  
女にも男気ありぬ花菖蒲  
夕風に飛翔の構へ花菖蒲  
縄文の丘に虹立つ左近詩碑  
道標に掛けて息継ぐ登山帽  
鉦と三味夜の膨らむ阿波踊  
魚河岸に名残惜しむや夏の月  
山出しの木落し大地揺るがせり  
駅名に惹かれて降りる夏帽子  
田蛙の声を分け入る夜道かな  
夕立や肩の割り込む立呑屋  
収集に合はす投函梅雨ごもり  
片陰を手押し車に譲りけり

千葉

塩野谷慎吾

藤代 康明

木村 美翠

靈峰の岩壁深く夕焼来る  
無言館辞して余情の夕焼かな  
白南風や潮の香広ぐ鳴門渦  
少年の未来は無限雲の峰  
白雨止みたちあらはるる故山かな  
立山の万緑海になだれけり  
敬白に余韻を覚ゆ更衣  
風生まれ風を褒め合ふ木下闇  
蜘蛛の巣や素数定理の美しき  
背信の匂ひ躑躅のほむらめき  
唐寺の国宝ふたつ桐の花  
五人姉妹まなかに生れて紅はちす  
暗き灯の蔵へ駆け込む夕立かな  
原爆忌柱と言ふは死者の数  
夏草や埋もれし舟の朽ちきれず

長崎

田川美根子

坂本 徹

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

路地裏へ四万六千日の風 小林 陽子

七月の初めに開かれる浅草寺の鬼灯市は四万六千日とも呼ばれる。江戸時代から「四万六千日」と呼ばれるようになったそうで、一日詣でるだけで、そのご利益は四万六千日分に相当するといわれるようになり、江戸の庶民に親しまれてきた。これは「米一升分の米粒の数が四万六千粒にあたり、一升と一生をかけた」という説がある。江戸風鈴のついた鉢物の鬼灯を買いながら、浴衣姿で浅草の街を散策するのも夏の風物詩の一つでたのしい。雑踏から少し離れて路地裏を散策していたら心地良い風が吹いてきた。

縄文の丘に虹立つ左近詩碑 藤代 康明

先日、市川の里見公園に詩人の宗左近さんの詩碑が建立され

た。江戸川やスカイツリーが望める小高い丘、晴れた日は遠く富士山も見えるところである。市川は縄文遺跡があり、まさにこの里見公園も縄文の丘と呼ぶに相応しいところである。詩碑となった市川讃歌の「透明の蕊の蕊」の歌詞の中にも「曙 いま 世界が垂直 市川 蕊の蕊の透明 はばたく 虹の風たち」と虹が登場するが、宗左近さんの詩には度々「虹」が登場する。いつかこの丘から虹を見ることが出来るかも知れない。

駅名に惹かれて降りる夏帽子 塩野谷慎吾

地名や駅名にはそれぞれ昔から由来があり、これを繙いていくと興味深いものがある。これらは地元の人には勿論のこと多くの人に親しまれてきた。夏帽子を被って、ぶらっと一人旅に出た。ローカル線あまり乗り降りがない駅であるが、駅の名に旅情を掻き立てられ、どんな所なのか途中下車を試してみた。これこそが旅の真髄である。

白雨止みたちあらはるる故山かな 木村 美翠

日本には季節ごとに多彩な雨の名がある。白雨もその一つで膝雨と同じ夏の季語である。突然の雨脚の激しさと、雨が白っぽく見えるさまからこの名がついたようだが、激しい雨に打たれて前が見えないほどである。作者は久しぶり故郷へ帰ったのだらう。生憎白雨に見舞われ先が見えないほどであったが、しばらくすると雨も収まり、懐かしい故郷の山々が顔を出し何かほっとした気持ちになった。(以下略)